＊この記事は日本経済新聞社の許諾を得て転載しています。 無断転載、複製を禁じます。

日経ＭＪ 2020 年 4 月 12 日 付

キーボード配列に見る旧弊

伊藤元重の エコノウオッチ

社会の中で一度確立した制度や慣行は、時代の変化によってそれが好ましくなくなっても、なかなか是正するのが難しい。経済学の世界でこの事例としてよく取り上げられるのが、キーボードの文字の配列だ。パソコンのキーボードをみると、上の段は左からＱＷＥＲＴＹとなっている。世界中のキーボードがそうなっているはずだ。

しかし、この配列にもはや合理性はない。これは150年近く前にレミントン社が出したタイプライターの文字列だ。当時の、タイピストが速くキーを続けて打つことでキーが詰まってしまうことが問題となっていた。この配列はこうした問題が起こりにくいように工夫されたものだ。決してこの配列なら文字が速く打てるわけではない。それでもこの配列は標準化し、世界中のタイプライターがこの配列になった。

速打ちによる問題がないはずのパソコンになっても、この配列は変わっていない。多くの人がこの配列に慣れており、別の配列の商品では売れない。配列を変えればキーを打つ効率は上がるようだし、商品も開発された。それでもＱＷＥＲＴＹには勝てなかった。今でも、世界中の人が使い勝手の悪い、この配列のキーボードを利用している。

キーボードの配列さえ改良は難しい。タイプライターからパソコンへと大きな技術革新が起きても、旧弊はしぶとく生き残っている。そうした意味では、改革や変革を免れて残っている制度や慣行は多くあるはずだ。ただ、そうした旧弊であっても、今回の新型コロナウイルスのような危機によって大きく変わる可能性がある。

危機が開く遠隔医療・教育

現在、大きな論議の対象となっている遠隔医療の拡大やｅラーニングの積極的な活用はその典型だ。これらは情報技術の進展として注目されてきた動きであるが、その導入のスピードは遅かった。

しかし、過度な接触を極力避けることが絶対的に必要となれば、遠隔医療やｅラーニングを進める重要性は誰の目にも明らかだ。多くの人が病院に集中して不要な接触を避けるためにも、そして多くの患者が病院に殺到して医療崩壊が起きるのを防ぐためにも、今こそ遠隔医療に積極的に取り組む必要がある。

幸い、そうした取り組みに必要な技術的な環境は整いつつある。ｅラーニングも同じだ。活用しない限り、教育を維持することは難しく、これがコロナウイルスが突きつけている現実だ。実際にｅラーニングをやってみると、思った以上にその成果を感じるという意見も聞く。

もちろん、対面での治療や診断、講義や教育指導に意味がないと言っているわけではない。問題なのは、医療も教育も対面でなくてはいけないという旧来の考え方だ。キーボードの配列の事例にも見られるように、旧来の仕組みや慣行は技術革新によって合理性を失うことがある。それでもそうした仕組みや慣行がしぶとく残る。新型コロナによって、そうした仕組みや慣行の改革に真剣に向き合わざるをえなくなっている。

（学習院大学国際社会科学部教授）